■研究発表論文

小学校校庭の巨樹を用いた環境教育実践経験が教員の意識に及ぼす影響

The Effects of Practical Experiences of Environmental Education Using Big Tree on Teachers' Perceptions in Elementary School

長友　大幸*　　加藤　博**　　岡田　準人***　　下村　孝****

Hiroyuki NAGATOMO　　*Hiroshi KATO*　　*Norito OKADA*　　*Takashi SHIMOMURA*

Abstract: We made the survey to evaluate effects of practical experiences of environmental education using big tree in elementary school on teachers' perceptions. The survey was done at four elementary schools where a big tree was growing in the school grounds. We compared perceptions of teachers without practical experiences with perceptions of teachers with practical experiences. From the results obtained in this study, we understood that many teachers think of a big tree as local property and the imminent existence that always watches them, and had practiced the environmental education using imminent trees except the big tree. Therefore, we concluded that it was necessary to have some skills to affect the environmental education using trees, deepen a sense of closeness close to frequency to a big tree and find value widely for improvement of the practice will of teachers for the environmental education using the big tree. On the other hand, when there is not a big tree in school grounds, we understood that it was important that teachers practiced an environmental education using imminent trees. We thought that improvement of teachers' perceptions for the environmental education using trees and the knowledge is important.

Keywords: *big tree, environmental education, practical experiences, teachers' perceptions*
キーワード：巨樹，環境教育，実践経験，教員の意識

１．はじめに

身近な樹木への関心を高め，保護意識の醸成をはかることを目的として，校庭に残存する巨樹を題材とした環境教育が試みられている[1,2]。長友・近江は，小学校の校庭に存在する巨樹に，在学時日常的に接していた児童ほど，在学時のみならず卒業後も巨樹に対して親しみを持ち続けるとともに，日常生活の中で樹木への接触行動をとろうとする傾向があること[1]を示し，長友・下村は，校庭の巨樹を用いた環境教育の受講経験が多い小学生ほど，巨樹への評価が高まるとともに，日常的な樹木に対する自然接触行動を誘発すること[2]等を明らかにしている。したがって，校庭に巨樹が残存する小学校で，保護意識を醸成するためには，教員による巨樹を活用した環境教育の実践が重要であり，教員の知識と意識の向上が求められる。しかし，環境教育を実践しうる教員の意識を調査し，巨樹を用いた環境教育を進める上での方向性を示した研究事例は見られない。そこで本研究では，巨樹を校庭に有する小学校において，教員の巨樹への評価及び環境教育の実践等に対する意識調査を行い，巨樹を用いた環境教育の実践の現状と問題点を明らかにし，教育現場でより多くの教員の取り組みを可能とする方策策定のための基礎資料を得ることを目的とした。

２．調査対象校の選定および調査方法

（１）調査対象校の選定

本研究では環境庁(1991)[3]の定義に従い，「地上約 130cm の高さでの幹周が 300cm 以上の樹木であり，地上から 130cm の位置において幹が複数に分かれている樹木の場合は，個々の幹の幹周の合計が 300cm 以上であり，そのうちの主幹の幹周が 200cm 以上のもの。」を満たす樹木を巨樹とした。

事前調査として，校庭に他の樹木と区別が容易な巨樹が存在する小学校であることを条件に，環境庁の調査報告書[4,5]および京都市の報告書[6]により調査対象校の検索を行った。次に，報告書より見出された小学校名でインターネット上の YAHOO！JAPAN による検索を行い，ホームページ等を確認した後，現地踏査による調査対象校の確認を行った。その結果，条件を満たす小学校を８校見出すことができた。それらのうち，教員へのアンケート調査に協力が得られた千寿本町小学校（東京都足立区），八基小学校（埼玉県深谷市），衣笠小学校（京都市北区），小針小学校（埼玉県北足立郡伊奈町）の４校をケーススタディの対象とした。

（２）調査方法

（ｉ）調査対象校の概要調査

現地踏査，学校長へのヒアリング及び既往研究[2,7]より，調査対象校に残存する巨樹の生育状況，児童の巨樹への日常的な係わりの様子，調査対象校の巨樹を用いた環境教育の現況等を把握した。

（ii）教員へのアンケート調査

各調査対象に勤務する教員を対象としたアンケートで，巨樹を用いた環境教育の必要性，関心，実践経験，巨樹への好感度および評価，授業外で話題として話す頻度，さらに，過去の巨樹以外の樹木を用いた環境教育実践経験等をたずねた。アンケート用紙は各小学校に 40 部ずつ用意した。そして，各小学校長の協力を得て，配布をあらかじめ委託し，放課後の時間等に実施してもらい，後日，回収する方法をとった。配布は平成 17 年２月下旬から３月中旬にかけて行った。

３．結果および考察

（１）調査対象校の概要

（ｉ）千寿本町小学校[2]

残存する巨樹はクスノキであり，樹高約 16m，幹周 560cm である。校庭全面を全天候型にする舗装工事の際に，伐採の予定であったが，保護を求める地域住民の強い要望があり，保存された。

学校長が集会でクスノキを取り上げて話をすることはあるが，学校として巨樹を教材として用いた学習を行う予定はなく，教員の裁量に任されている。総合的な学習の時間が「くすのきタイム」と名づけられており，学校のシンボルとして位置づけられている。

*埼玉学園大学人間学部　**金城大学短期大学部　***甲子園短期大学　****京都府立大学大学院生命環境科学研究科

表－1　環境教育への意識

環境教育への意識	回答数（%）		
	とてもある	少しある	その他[a]
授業や学級経営の中で巨樹を用いた環境教育の必要性を感じること	30(61.2)	14(28.6)	5(10.2)
巨樹を用いた環境教育の関心	13(26.5)	26(53.1)	10(20.4)
巨樹を用いた環境教育の実践経験	8(16.3)	17(34.7)	24(49.0)

a:「どちらともいえない」「あまりない」「ない」の計（「無回答」1名含む）

（ⅱ）八基小学校[7]

樹高 20m，幹周 512cm の緑量に優れたクスノキの巨樹が残存している。千寿本町小学校と同様，学校として巨樹を教材とした学習は実施していない。その存在感から，学校のシンボル的な存在となっており，総合的な学習の時間の呼称を「くすのきタイム」，その学年末の発表会を「くすのきワールド」と名付け，開催時には地域住民を招待している。

（ⅲ）衣笠小学校[2]

樹高 17m，幹周 391cm のクスノキが残存し，学校のシンボルとなっている。そのため，総合的な学習の時間を「くすのき学習」，児童会の夏休みキャンプを「くすのきキャンプ」，ＰＴＡ・児童会が行う祭りを「くすのき祭」等，「くすのき」の名を学校行事と関連づけていることが多い。しかし，前２校同様，学校として巨樹を教材とした学習は取り組んでおらず，その取り扱いは各教員の裁量に任されている。

（ⅳ）小針小学校

町指定の天然記念物に指定されたイチョウの巨樹を有しており，樹高は 25m，幹周 365cm である。「すずかけや　大いちょう 桜なみきも　この庭で 元気にのびる子を　みているよ・・・」と校歌に歌われたり，学校だよりのタイトル（大いちょう）になったりと，児童にとって巨樹は学校の象徴となっている。記念写真を撮る際は，児童の方で希望してイチョウの前で撮ることも多く，児童の心の奥に残る樹木となっている。なお，学校として巨樹を教材に用いた学習はなされておらず，各教員に任されている。

（２）教員へのアンケート

本研究では，各小学校の教員を対象にアンケートを実施し，回収された有効回答票は，千寿本町小学校 10 票，八基小学校 13 票，衣笠小学校 8 票，小針小学校 18 票であった。なお，以下に示すアンケート結果については，地域および樹種に違いがあるものの，各校ともに概ね類似していた。しかし，全数が 49 票であり，個々の学校からの回答数が少数のため，学校間の差の検定は不可能と判断した。また，男女間（男女比 3:1）および樹種間（千寿本町小学校，八基小学校および衣笠小学校の３校と小針小学校間）で見た結果も同様に類似しており，ｔ 検定による有意な差は認められなかった。そこで，全体を合わせて検討することとした。

（ⅰ）巨樹を用いた環境教育の必要性，関心，実践経験

表-1 に示すように，巨樹を用いた環境教育の必要性，関心，実践経験のそれぞれについて，「とてもある」，「少しある」，「どちらとも言えない」，「あまりない」，「ない」の５段階の回答を定めた。その結果，「授業や学級経営の中で巨樹を用いた環境教育の必要性を感じること」については，「とてもある」（61.2%），「少しある」(28.6%) を合わせて 89.8%，「巨樹を用いた環境教育の関心」については，「とてもある」（26.5%），「少しある」（53.1%）を合わせて 79.6%であり，巨樹を用いた環境教育の必要性を多くの教員が感じ，関心をもっていることがわかった。一方，「巨樹を用いた環境教育の実践経験」については，「とてもある」(16.3%)，「少しある」（34.7%）を合わせて 51.0%に留まっており，実践経験のある教員は少ない。このことから自校に巨樹が存在し，その利活用に対する意欲はあるものの，実践に結びついていない教員が多いことが把握された。前述したように，児童の巨樹への評価，日常的な樹木に対する自然接触行動は，環境教育受講経験と大きな係わりがある[2]ことが認められている。したがって，実践経験に結びついていない現状は大きな問題であり，多くの教員が実践可能となるような方策を追究する必要があるものと思われる。なお，表-2 には実践経験のある教員が行った実践内容を示した。「歴史について」の学習が多くの教員によってなされており，単なる樹木としてではなく，歴史を感じさせる文化財的な感覚で教員は接しているのではないかと考えられる。

表－2　実践の内容

実践の内容	複数回答による回答数※（%）
歴史について	14(56.0)
写生や工作のモデル	5(20.0)
葉を用いた	5(20.0)
幹周など巨樹本体を調べた	2(8.0)
巨樹にくる鳥や虫	2(8.0)
実を用いた	1(4.0)
樹皮を用いた	1(4.0)

※表-1における「実践」が「とてもある」「少しある」と答えた回答者における回答数

（ⅱ）実践経験の有無による教員の意識の比較

調査対象の４校ともに，学校として巨樹を教材として用いた学習を行っておらず，巨樹を用いた環境教育の実践は教員の裁量となっている。そのため，表-1 に示すように，巨樹を用いた環境教育の実践経験がある教員とない教員とが存在し，先述のように各校ともに類似した様子を示していた。ここでは，表-1 に示した「巨樹を用いた環境教育の実践経験」において，「とてもある」，「少しある」と回答した教員を実践経験「有」，その他の回答の教員を実践経験「無」とし，実践経験の有無による巨樹に対する意識等の差異を明らかにし，多くの教員の実践を誘発するための方向性を探った。

① 巨樹に対する好感度

「校庭の巨樹を好きだ」に対する回答は，実践経験「有」では「思う」（72.0%），「少し思う」（28.0%）を合わせて 100%であり，実験経験「無」においても，「思う」（79.2%），「少し思う」（20.8%）を合わせて 100%であった（表-3）。このことから，巨樹を用いた環境教育実践経験の有無に係わらず，全ての教員が自校の巨樹に対して好感を持っていると考えられた。したがって，教員の巨樹への親しみが，そのまま巨樹を用いた環境教育の実践に結びつくとは言えないことがわかった。

表－3　巨樹への好感度

巨樹への好感度	実践経験の有無による差				
	実践経験	回答数（%）			有意差検定[d]
		思う	少し思う	その他[c]	
校庭の巨樹が好きだ	有(n=25)[a]	18(72.0)	7(28.0)	0(0.0)	－
	無(n=24)[b]	19(79.2)	5(20.8)	0(0.0)	
	計(n=49)	37(75.5)	12(24.5)	0(0.0)	

a:「有」,「とてもある」「少しある」の計

b:「無」,「どちらともいえない」「あまりない」「ない」の計（「無回答」1名含む）

c:「どちらともいえない」「あまり思わない」「思わない」の計

d:実践経験の有無によるt検定の結果　**:p<.01　*:p<.05　－:有意差なし

② 巨樹への評価

既往の研究[1,2]に準じて，「景色をよくしてくれる」，「歴史を感じさせてくれる」等，巨樹への評価を表12項目について，「思う」，「少し思う」，「どちらともいえない」，「あまり思わない」および「思わない」の5段階に分けて回答を求めた（表-4）。そして，教員の巨樹を用いた環境教育実践経験の有無と巨樹への評価との関わりを知るために，t 検定による有意検定を行った。その結果，「神が宿るような神秘的な感じがするもの」以外の11項目では，実践経験の有無に係わらず「思う」，「少し思う」との回答が66%以上を示していた。そして，「地域の宝であり，誇るべきもの」，「いつも見守ってくれる守り神のようなもの」の2項目において，巨樹を用いた環境教育の実践経験が，「とてもある」，「少しある」と回答した教員と，その他の回答をした教員との間に有意な差が認められた。

表－4　巨樹への評価

巨樹への評価	実践経験の有無による差				
	実践経験	回答数（%）			有意差検定[d]
		思う	少し思う	その他[c]	
景色をよくしてくれる	有(n=25)[a]	19(76.0)	4(16.0)	2(8.0)	－
	無(n=24)[b]	20(83.3)	3(12.5)	1(4.2)	
	計(n=49)	39(79.6)	7(14.3)	3(6.1)	
歴史を感じさせてくれる	有(n=25)[a]	24(96.0)	1(4.0)	0(0.0)	－
	無(n=24)[b]	20(83.3)	3(12.5)	1(4.2)	
	計(n=49)	44(89.8)	4(8.2)	1(2.0)	
木陰が安らぎを感じさせてくれる	有(n=25)[a]	19(76.0)	2(8.0)	4(16.0)	－
	無(n=24)[b]	21(87.5)	2(8.3)	1(4.2)	
	計(n=49)	40(81.6)	4(8.2)	5(10.2)	
鳥などが集まり，自然を感じさせてくれる	有(n=25)[a]	9(36.0)	9(36.0)	7(28.0)	－
	無(n=24)[b]	12(50.0)	7(29.2)	5(20.8)	
	計(n=49)	21(42.9)	16(32.7)	12(24.5)	
落葉が季節を感じさせてくれる	有(n=25)[a]	19(76.0)	3(12.0)	3(12.0)	－
	無(n=24)[b]	16(66.7)	5(20.8)	3(12.5)	
	計(n=49)	35(71.4)	8(16.3)	6(12.2)	
地域の宝であり，誇るべきもの	有(n=25)[a]	21(84.0)	4(16.0)	0(0.0)	*
	無(n=24)[b]	14(58.3)	8(33.3)	2(8.3)	
	計(n=49)	35(71.4)	12(24.5)	2(4.1)	
学校の宝であり，誇るべきもの	有(n=25)[a]	24(96.0)	1(4.0)	0(0.0)	－
	無(n=24)[b]	19(79.2)	4(16.7)	1(4.2)	
	計(n=49)	43(87.8)	5(10.2)	1(2.0)	
生命の大切さを感じさせてくれる	有(n=25)[a]	18(72.0)	6(24.0)	1(4.0)	－
	無(n=24)[b]	13(54.2)	10(41.7)	1(4.2)	
	計(n=49)	31(63.3)	16(32.7)	2(4.1)	
自然の大切さや不思議さを感じさせてくれる	有(n=25)[a]	20(80.0)	4(16.0)	1(4.0)	－
	無(n=24)[b]	14(58.3)	8(33.3)	2(8.3)	
	計(n=49)	34(69.4)	12(24.5)	3(6.1)	
いつも見守ってくれる守り神のようなもの	有(n=25)[a]	13(52.0)	10(40.0)	2(8.0)	*
	無(n=24)[b]	9(37.5)	7(29.2)	8(33.3)	
	計(n=49)	22(44.9)	17(34.7)	10(20.4)	
木の力強さを感じさせてくれる	有(n=25)[a]	20(80.0)	5(20.0)	0(0.0)	－
	無(n=24)[b]	16(66.7)	5(20.8)	3(12.5)	
	計(n=49)	36(73.5)	10(20.4)	3(6.1)	
神が宿るような神秘的な感じがするもの	有(n=25)[a]	2(8.0)	10(40.0)	13(52.0)	－
	無(n=24)[b]	2(8.3)	8(33.3)	14(58.3)	
	計(n=49)	4(8.2)	18(36.7)	27(55.1)	

a:「有」,「とてもある」「少しある」の計
b:「無」,「どちらともいえない」「あまりない」「ない」の計（「無回答」1名含む）
c:「どちらともいえない」「あまり思わない」「思わない」の計
d:実践経験の有無によるt検定の結果 **:p<.01 *:p<.05 －:有意差なし

以上の結果から，教員の多くは実践の有無にかかわらず，巨樹に対して多くのプラス評価をしているが，その中にあって，実践経験のある教員は，実践経験のない教員に比べ，自校の校庭に残存する巨樹の価値を地域レベルでとらえ，「守り神」とも思える，極めて身近な存在として意識していることがわかった。住居系住宅街の住民の意識調査により，巨樹に接触する機会が多いほど，巨樹をプラスに評価するとの結果が報告されている[8]。したがって，巨樹を用いた環境教育の実践に教員の意識を向けるには，教員が巨樹に接する機会を作り，巨樹を身近な存在であると認識させて，教員による巨樹の評価を高めることが重要だと考えられる。

なお，本研究では，実践経験の結果，巨樹を「地域の宝」と認識したのか，「地域の宝」という認識が実践を誘発したのかなどの因果関係を明確にすることは困難である。しかし，表-1，2に示すように，実践経験のある教員の内の多くは，生活科や総合的な学習の時間を中心として，巨樹の歴史等を調査している。教員へのアンケートの自由記述欄には，調査の際，学校内に留まらず地域に出て行き，児童とともに地域の高齢者にヒアリングを行ったり，年配の卒業生が巨樹を見にきた姿を見かけたりしたとの記述が複数見られた。こうした経験を通じて，巨樹と地域との関わりを実感できたことが，巨樹の価値を地域レベルでとらえ得た要因として推測できる。そして，学校のみならず「地域」の宝という認識を教員が持つことで，さらに教材として取り上げようとする意識が向上するのではないかと考えられる。授業のみならず，多くの教育活動の中で，学校内に留まらず，「地域の中の巨樹」という認識を教員がもつことができるよう，巨樹を題材に学校と地域との係わりを深める方策が必要と考えられる。

③ 巨樹の話の頻度

「学級や集会などで児童に巨樹の話をすること」に対する回答は，実践経験「有」では「よくある」（40.0%），「たまにある」（52.0%）であり，巨樹の話をすることがあるとの回答が合わせて92.0%となった。一方，実験経験「無」においては，「よくある」（20.8%），「たまにある」（45.8%）であり，合わせて66.7%であった（表-5）。そして，t 検定では，環境教育の実践経験が「とてもある」，「少しある」と回答した教員ほど，他の回答をした教員に比べ，巨樹の話をすることが「よくある」，「たまにある」とする割合が有意に高いことがわかった。このことから，巨樹を用いた環境教育を実践することで巨樹に対する関心がより高まり，授業以外の場において「巨樹の話をする」活動につながったと考えられる。長友・下村[2]は，巨樹に係わることを資料集等で調べたり，巨樹の歴史についての話をしたり等の「概念的な学習」においても，巨樹に対する児童の評価や保護意識を高める効果があることを報告している。したがって，授業以外での「巨樹の話を

表－5　巨樹の話の頻度

巨樹の話の頻度	実践経験の有無による差				
	実践経験	回答数（%）			有意差検定[d]
		よくある	たまにある	その他[c]	
学級や集会などで児童に巨樹の話をすること	有(n=25)[a]	10(40.0)	13(52.0)	2(8.0)	*
	無(n=24)[b]	5(20.8)	11(45.8)	8(33.3)	
	計(n=49)	15(30.6)	24(49.0)	10(20.4)	

a:「有」,「とてもある」「少しある」の計
b:「無」,「どちらともいえない」「あまりない」「ない」の計（「無回答」1名含む）
c:「どちらともいえない」「あまりない」「ない」の計
d:実践経験の有無によるt検定の結果 **:p<.01 *:p<.05 －:有意差なし

表－6　巨樹の話の内容

話の内容	複数回答による回答数※（%）
巨樹の歴史	21(84.0)
生徒の成長との関係	14(56.0)
生命の尊さ	13(52.0)
自然の大切さ	11(44.0)
巨樹の伝説	5(20.0)
樹木の効用	5(20.0)

※表-5における「学級や集会などで児童に巨樹の話をすること」が「よくある」「たまにある」と答えた回答者における回答数

する」活動にも，児童への教育効果が十分に期待できるものと考えられる。巨樹を用いた環境教育を実践することは，授業やその他の機会での児童への教育効果を考えた場合，大きな意義があると思われる。なお，表-6 には学級や集会など，授業以外の場で教員が児童に伝えた巨樹に関わる話の内容を示した。「巨樹の歴史」や「成長との関係」などが多く，巨樹を樹木の範囲内で捉えるのではなく，長年生きてきた尊い存在として位置づけて話を伝えていることがわかった。

④ 巨樹以外の樹木を用いた環境教育の実践経験

「自校の巨樹以外の樹木を用いて，過去に環境教育を実践したことがあるか」に対する回答は，実践経験「有」は，「とてもある」（16.0%），「少しある」（56.0%）であり，合わせて 72.0%であった。一方，実践経験「無」では，「とてもある」との回答はなく，「少しある」が 37.5%であった（表-7）。そして，t 検定の結果，環境教育の実践経験が「とてもある」，「少しある」と回答した教員ほど，他の回答した教員に比べ，自校の巨樹以外の樹木を用いて，過去に環境教育を実践したことが「とてもある」，「少しある」とする割合が有意に高いことがわかった。長い年月にわたって生き抜いてきた巨樹は，単に緑の役割を持つのみならず，文化財・信仰の対象[9,10]，生命の尊厳や大切さを教育する上での教材[11]としても重要であることが指摘されている。このことから，表-2 に示した実践内容のうち，巨樹に特化した実践内容と思われる「歴史について」や「幹周など巨樹本体」の調査により，上記のような教育効果が得られるものと考えられる。一方，検定の結果から，それ以外の「葉，実および樹皮」を用いた調査や「鳥や虫」の調査等については，巨樹を用いた実践のスキルが巨樹以外の樹木による実践にいかされた，もしくは巨樹以外の樹木による実践のスキルが巨樹を用いた場合にいかされたものと考えられる。本研究では，それがどちらであるかを明確にすることは困難であるが，自校に巨樹がない場合であっても，身近な樹木を用いて環境教育を実践していくことで得られた実践スキルが，将来的に異動先に巨樹が残存した場合，巨樹を用いた環境教育の実践スキルの一部として役立つこととなり，教員の実践行動の誘発につながるものと考えられる。

4．おわりに

本研究では，校庭に巨樹を有する 4 つの小学校を対象に，教員の巨樹を用いた環境教育の必要性，関心，実践経験，巨樹への好感度および評価，授業外で話題として話す頻度，過去の巨樹以外の樹木を用いた環境教育実践経験等について調査した。

巨樹を用いた環境教育の必要性，関心および実践については，多くの教員が必要性を感じ，関心をもっているにもかかわらず，その必要性と関心が実践に結びついていない問題点が把握された。

実践経験の有無による教員の意識の差異による解析を行ったところ，実践経験の有無による差異として，巨樹への評価の「地域の宝であり，誇るべきもの」，「いつも見守ってくれる守り神のようなもの」や「学級や集会などで児童に巨樹の話をすること」に有意な差が認められた。このことから，巨樹を用いた環境教育の実践に教員の意識を向けるには，巨樹に接する機会を多く与え，巨樹への教員の評価を向上させるとともに，地域と巨樹との係わりを知り，深める方策が必要であると考えられた。そして，実践することで巨樹に対する関心がより高まり，授業以外の場でも話題として取り上げることとなり，教育効果が増大するものと考えられた。なお，巨樹を用いた環境教育の実践経験がある教員ほど，自校の巨樹以外の樹木を用いて，過去に環境教育を実践した経験を有している割合が有意に高かった。これは，巨樹を用いた実践のスキルの一部が巨樹以外の樹木による実践にいかされたか，巨樹以外の樹木による実践のスキルが巨樹を用いた実践のスキルの一部としていかされたものと考えられた。

表－7　巨樹以外の樹木を用いた環境教育の実践

巨樹以外の樹木を対象とした環境教育	実践経験の有無による差				
	実践経験	回答数（%）			有意差検定[d]
		とてもある	少しある	その他[c]	
樹木を用いた環境教育の実践	有(n=25)[a]	4(16.0)	14(56.0)	7(28.0)	**
	無(n=24)[b]	0(0.0)	9(37.5)	15(62.5)	
	計(n=49)	4(8.2)	23(46.9)	22(44.9)	

a:「有」,「とてもある」「少しある」の計
b:「無」,「どちらともいえない」「あまりない」「ない」の計（「無回答」1名含む）
c:「どちらともいえない」「あまりない」「ない」の計
d:実践経験の有無によるt検定の結果　**:p<．01　*:p<．05　-:有意差なし

以上より，教育現場で，巨樹を用いた環境教育がより多くの教員により実践されることが可能となるためには，次の点を考慮すべきであると考えた。

既に自校に巨樹が校庭に残存している教員の場合は，地域と巨樹との係わりを認識し，巨樹への評価を高めることができるよう，巨樹と頻繁に接する機会を持つとともに，環境教育の実践を行う際には，巨樹と地域との係わりを感じられるよう，校内のみならず，地域に出て調査等を行うことが重要であると考えられた。一方，自校に巨樹が残存しない場合には，身近にある樹木を用いて環境教育を実践していくことで，巨樹を用いた環境教育の実践スキルの一部を取得することとなり，将来的に巨樹が残存する学校に異動した際の実践行動の誘発につながるものと考えられた。

引用・参考文献

1）長友大幸・近江慶光（2003）：小学校校庭の巨樹が卒業生の意識および自然接触行動に与える影響：ランドスケープ研究 66(5)，847-850
2）長友大幸・下村孝（2006）：校庭の巨樹を用いた環境教育受講経験が児童の意識に及ぼす影響：ランドスケープ研究 69(5)，829-834
3）環境庁(1991)：日本の巨樹・巨木林（全国版），大蔵省印刷局，1-5
4）環境庁(1991)：日本の巨樹・巨木林（関東版Ⅱ），大蔵省印刷局
5）環境庁(1991)：日本の巨樹・巨木林（近畿版），大蔵省印刷局
6）京都市立学校・幼稚園名木百選編集発行委員会（1997）：平成 6 年度・平成 7 年度選定京都市立学校・幼稚園名木百選，京都市立学校・幼稚園名木百選編集発行委員会
7）長友大幸・下村孝（2010）：校庭に残存する巨樹への接近頻度と環境教育受講経験が児童の意識に及ぼす影響：ランドスケープ研究 73(5)，741-746
8）長友大幸・近江慶光・丸田頼一（1993）：住居系市街地における巨樹に係わる住民意識に関する研究：造園雑誌 56(5)，283-288
9）牧野和春（1989）：異相巨木伝承：牧野出版，196-214
10）牧野和春（2000）：日本巨樹論：惜水社，23-49
11）唐沢孝一（2000）：語り継ぐ焼けイチョウ：北斗出版，195-197